



工藤元男学位請求論文概要書

(題名、工藤元男著『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』創文社、1998年3月刊)

本書の構成は次の通りである。

凡 例

序 章 睡虎地秦簡と中国古代社会史研究

第一章 内史の再編と内史・治粟内史の成立

はじめに

第一節 睡虎地秦簡にみえる内史の問題点

1 内史と穀倉

2 内史と公器

第二節 睡虎地秦簡にみえる内史の構成

1 内史と大倉・県・都官

2 内史と大内・県・都官

第三節 内史の変遷と再編

1 内史と治粟内史

2 戦国末期の内史の再編

むすび

第二章 秦の都官と封建制

はじめに

第一節 先学の解釈とその問題点

第二節 秦簡にみえる都官の構造

第三節 都官設置の歴史的背景

むすび

第三章 秦の領土拡大と国際秩序の形成

はじめに

第一節 秦の属邦と道制

第二節 前漢における属国と道

第三節 後漢における属国と道

第四節 秦簡における属邦と臣邦真戎君長

むすび

第四章 睡虎地秦簡「日書」の基礎的検討

はじめに

第一節 「日書」の形態とその内容

1 冊書としての「日書」

2 「日書」甲乙篇のあいだの異同

第二節 「日書」の占法原理と問題点

- 1 五行説と三合
- 2 『易』との関係
- 3 建除（十二直）
- 4 二十八宿占い

第三節 日者と「日書」の関係

第四節 その他の「日書」について

- 1 定県漢簡「日書」
- 2 阜陽漢簡「日書」
- 3 湖北江陵九店東周墓竹簡「日書」
- 4 江陵張家山漢簡「日書」
- 5 放馬灘秦簡「日書」
- 6 江陵王家台十五号秦墓「日書」
- 7 その他

むすび

第五章 「日書」を通してみた国家と社会

はじめに

第一節 「日書」の語彙分析よりみた甲種と乙種の用字傾向

- 1 「也」字と「毆」字
- 2 「罪」字と「臯」字
- 3 「凶」字と「兇」字
- 4 「喜」字と「憙」字
- 5 「日書」の用字傾向とその意味するもの

第二節 「日書」の占辞における地域性をめぐる問題点

第三節 「日書」の語彙分析よりみた国家の諸相

- 1 地方行政制度の諸相
- 2 君主の諸相

第四節 「日書」の語彙分析よりみた官制の諸相

- 1 官と吏
- 2 入官・臨官の吉凶
- 3 舊夫への関心
- 4 生子と吏
- 5 吏の側からみた「為吏之道」

むすび

第六章 先秦社会の行神信仰と禹

はじめに

第一節 漢代の行神と祖道

- 1 行神の名称
- 2 祖道の場所
- 3 祖道の予祝儀礼と輶壇

第二節 「日書」における行神と祖道

- 1 行祠と輶壇
- 2 行旅の名称
- 3 祖道と禁忌
- 4 禹歩

第三節 出行における吉凶の時日とその構造

- 1 出行日と納音
- 2 出行日と時刻の関係
- 3 時刻と喜数の関係
- 4 十二時制と十六時制

第四節 帰家の吉凶と通過儀礼

- 1 帰家の吉凶
- 2 帰家の通過儀礼

むすび

第七章 「日書」における道教的習俗

はじめに

- 第一節 中国古代の行旅
- 第二節 放馬灘秦簡「日書」にみえる「律書」と納音
- 第三節 禁呪の形式
- 第四節 禹歩と四縦五横

むすび

第八章 禹の変容と五祀

はじめに

- 第一節 嫁娶日の吉凶にかかわる禹
- 第二節 治癒神としての禹
- 第三節 アジールの神としての禹
- 第四節 行神祭祀と五祀

むすび

第九章 「日書」に反映された秦・楚のまなざし

はじめに

- 第一節 「玄戈」における秦・楚の占法原理の差異
 - 1 二十八宿占いと吉凶の排列
 - 2 招搖・玄戈の占法原理
 - 3 「玄戈」における楚のまなざし
- 第二節 「稷辰」・「秦」における楚のまなざし
- 第三節 建除における楚のまなざし
- 第四節 「歳」における秦のまなざし

むすび

第十章 秦の嗇夫制と県制

はじめに

- 第一節 県邑を主管する嗇夫
- 第二節 県令と県嗇夫・大嗇夫
- 第三節 「語書」と県・道嗇夫
- むすび

終章 睡虎地秦簡よりみた戦国秦の法と習俗

- はじめに
- 第一節 秦律にたいする楚暦の影響
- 第二節 「封診式」毒言における悪口のタブー
- 第三節 「封診式」にあらわれた国家と家族・共同体
- 第四節 「語書」と六国の統一
- 第五節 戦国秦における法治主義の転換
- むすび

あとがき

秦簡簡番号対照表

索引（事項・書名・引用文献）

本書は六国統一過程における秦の法治主義の特質と変容過程を、睡虎地秦簡のテキストクリテックに基づき、法制史的・社会史的手法を組み合わせ、詳細に分析したものである。各章の内容を要約すると以下ようになる。

序章——近年中国各地から出土している簡牘史料のもつ重要性に注目し、とりわけ1975年末に湖北省雲夢県睡虎地の11号秦墓から出土した戦国末の睡虎地秦簡（以下、秦簡）に対して基礎的な検討を行う。なお秦簡とは戦国後期に秦が楚都郢を陥落させその地一帯に置いた南郡の小吏の墓葬から出土したものである。その内容は秦律を中心とする法制史料と占書の「日書」からなる十篇のテキストである。第一章——内史はこれまで京師を掌治する官と理解されてきたが、秦簡の内史は漢代で国家財政を管掌する治粟内史と似ている。そこで内史の変遷を検討し、王の册命を管掌する周の内史を継承した秦の内史が、その後京師掌治の官になるまでの過程で内史の再編があったことを追跡し、戦国末に内史が再編されて京師掌治の内史と国家財政掌治の治粟内史が生まれたことを指摘し、その再編の目的が支配拠点としての京師の強化と財政機構の整備にあったことを論証する。第二章——六国統一の過程で秦が直面したもう一つの重要問題は国内の封建遺制であり、宗室貴戚の拠る旧邑や軍功褒賞制による封邑を郡県制の中に取り込むために置かれた地方行政機構が秦簡にみえる都官であることを論証する。第三章——国内の中央集権化を推進すると共に、周辺地域に対する征服を進め、多数の旧六国民や異民族を抱え込んだ秦が、彼らを如何なる法的手続きで“新秦人”に編入したかを身分制の原理から解明し、またその検討を通じて秦を中心とする国際秩序の構造も復原する。

以上が秦律等の法制史料から検証された統一過程の問題であるが、かくして秦の支配体制に組み込まれた社会の実相が同じ秦簡からどのように浮上してくるのかを「日書」によ

って検証したのが、以下の諸章である。第四章——「日書」を先秦社会史研究の重要な史料として使用するための基礎作業として、占法原理を含む総合的な検討を行い、また近年各地から出土が報告されている他の「日書」についても紹介する。第五章——秦簡全文をデータベース化し、それによって秦簡全体における「日書」の用字傾向を析出し、「日書」が秦律等の法制文書と異なる書き手によることを実証する。さらに国家や官制に関する語彙を系統的に分類し、そこから国家や社会に対する吏民のイメージ、官吏たちの心象風景等を浮上させる。第六章——こうして社会の輪郭を「日書」の語彙分析により画定した上で、吏民の日常生活を構造的に表白するものとして、禹を行神（行旅の神）とする信仰に着目する。すなわち古代人の行旅の全行程を復元することにより、行神信仰の構造を明らかにする。第七章——行神信仰を支える諸習俗を秦簡の後に出土した同時代の他の秦簡によって傍証し、それらの諸習俗が道典にみえることを確認し、禹を行神とする信仰世界が後世の道教へ吸収されていったことを指摘する。第八章——禹の信仰形態の多様性に関する記事を文献佚文や出土文字資料等から蒐集し、それらの諸信仰が時日によって構造化されていることを指摘し、そこで再び行神信仰をとりあげ、それが後に五祀の中に組み込まれ、さらにその祭祀が經典化されて国家祭祀まで上昇するが、そのため逆に固有の内容を喪失してゆくことを論証する。

「日書」に基づく如上のような先秦社会像の復元を踏まえ、そのような社会に対して秦が如何なるまなざしを注いでいたかに注視し、以下の三章では秦と在地社会の関係を中心に論ずる。第九章——「日書」の中に占領者の秦人と被占領者の旧楚人の双方のまなざしが交差する占辞があるのを発見し、両者が占トを通じてどのように向かい合っているかを占法原理の分析から明らかにする。第十章——「日書」を通じて検証された秦と在地社会の関係は、秦の現実的で緩やかな法治主義の反映であると指摘し、そのような秦の法治主義の特質を都官の例と重ねながら、秦が春秋以来の在地性を残す県邑およびその管理者の県嗇夫（大嗇夫）をどのように県制に組み込んでいったかを検証する。終章——秦簡には在地社会の習俗を許容する傾向と、逆にその習俗を「悪俗」と弾劾して一元的支配を志向する二つの相反する傾向が顕著にみられる。しかしそれは単なる矛盾ではなく、墓主の生きた時代が秦の法治主義の転換期に当たっていたことを示すとする。その転換期を境に秦の法制支配がどのように共同体内部へ浸透していったかを秦簡「封診式」によって分析し、最後にその転換期の帰着する制度的象徴としての皇帝号の意味についても論及する。

以上を要するに、本書は六国統一の過程における秦と占領地の関係に焦点をあわせ、とくに南郡を例にとって秦律が占領地の習俗の厚い壁に阻まれ変容を余儀なくされた段階から、それが次第に共同体内部に浸透し、やがて秦の支配体制が一元的支配に転換してゆくまでのダイナミズムを、秦簡のテキストクリティーク、データベース化による語彙の用例分析、それに基づく厳密な原文解説によって検証している。またその如上のモチーフを秦の側から一方的に検討するのではなく、秦律（支配者の法）と在地社会の習俗（生きた法）を対峙させながら双方向的に分析する視座を社会史に求め、秦律を中心とする法制史料と占いのテキストである「日書」を同時に利用する方法を採用している。睡虎地秦簡の史料研究を基礎とする本書は、戦国・秦史研究に新しい分野を切り拓くものである。